

FIAFリュブリャナ会議報告

A Report on the 61st FIAF Congress in Ljubljana二つの問い——「民族誌映画とは何か」
「映画フィルムとは何か」

岡島 尚志

Hisashi Okajima

連載:

フィルム・アーカイブ
の諸問題
第57回

第61回国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)会議は、スロベニア¹の首都リュブリャナ²で、6月5日(日)から11日(土)まで開催された。本稿は、今会議の概要を行われたシンポジウムを中心に報告し、特に重要と思われる議論等を紹介するものである。

シルヴァン・フルランの死

旧ユーゴスラビア北部の国スロベニア共和国で行なわれた今回のFIAF会議は、同国の映画百年³を記念して、正会員である国立アーカイブ(Arhiv Republike Slovenije/Slovenski Filmski Arhiv、ヴラディミール・ブーメル所長)と準会員であるシネマテーク(Slovenska Kinoteka [Slovenian Cinematheque])が共同ホストになるという形で準備が進められてきたが、開催直前の4月22日、シネマテーク代表のシルヴァン・フルランが急死したため、一時開催自体が危ぶまれる事態となったこともあり、開会に当たっては、映画史家、評論家としても活躍したフルランを偲ぶ特別上映会⁴が行なわれ、さらに挨拶に立ったヴァスコ・シモニチ文化大臣によって彼の業績が顕彰された。また、これを機に同大臣は、フ

ランらの念願であったシネマテークの専用劇場開設を確約する書類に署名し、FIAF会長がその記者発表に立ち会った。

民族誌学の立場からみた映画／文化

シンポジウムは、民族誌学の立場から映画／文化とその保存について考察しようというもので、「われわれは文化をどのように視覚化しているか(How do we visualize culture?: Representations of culture in the light of ethnographic film)⁵」と名づけられた。FIAF会議は、1997年のカルタヘナで「アマチュア映画」を、2001年のラバトで「植民地映画」⁶をシンポジウム・テーマに選んできたが、今回の「民族誌映画」も、明らかにそうした路線の延長線上にあり、実際、それら三つのジャンル／コンセプトには相互に重なり合う部分も多い(「植民地で映画製作のアマチュアであるフィールドワーカーが民族誌研究のために撮影をした」というのが珍しくないというのは分かりやすい道理だろう)。実際、2日間にわたって行なわれた20ほどの研究発表や関連フッテージの映写⁷にも、植民地(主義的)映画の話題は少なかつたし、また、元来、非劇映画がアマチュアによって作られるのは劇映画よりも多いという歴史的事実に加え、作り手のアマチュア度は、近年の映像機器の小型軽量化、操作性の向上によって、より高まっているとも言えるだろう。

ただし、植民地映画に関して言えば、ポルトガルの若手研究者ティアゴ・バプティスタが、民族誌映画は、その出自として——とりわけヨーロッパ諸国にとって——植民地映画と重なり合う部分があるが、一方でヨーロッパには自律的な学問としての人類学、民族誌学の伝統があり、地方／地域／国家の文化的アイデンティティを表象しようとする学者たちの情熱もあって、そこから生まれた部分も無視できないことを強調していたのは故あることであろう。

いずれにせよ、負の政治性を内包するいかなる可能性にもかかわらず、映画は保存さえされれば、「時のかけら(piece of time)」として、後世の貴重な文化財、歴史資料となること——その事実だけは、次の3つのプレゼンテーションのみならず、どれにおいても十分に説得的であった。

1. ジェームズ・マクドナルドがニュージーランド政府から依頼されて1920年代前半に撮影したマオリ族の映像は、同国フィルム・アーカイブの宝として保存されているが、自身マオリの血を引く発表者フィア・コプアは、映像を見せながら、それらが(1)ニュージーランドが世界に発信した国家イメージ／ブランドとしても機能していたこと、(2)欧化を経験する前のマオリの文化や習俗を正確に伝えるものとして高度な記録的価値を持つこと、(3)現在、各地のマオリ・コミュニティでの上映を通して子孫たちと先祖、また非マオリの人々とを結びつけるのに役立っていること等を述べた。

2. ノルウェー映画協会のキエル・ビリング(プログラミング & アクセス・コミッション委員長)は、ノルウェー人口の0.5%を占めるサーミ族の人々が、ノルウェー劇映画の中で1920年代から今日まで歴史的にどう扱われてきたか——「異民族」扱いから始まり「狡賢い悪者役」というクリシェを経て、70年代には「抑圧された少数民族」に変わり、近年は「超現実的な存在」として描かれるに至るまで——をクリップとともに解説しながら、フィクションもまたエスノグラフィック・フィルムとしての性格を有することを示した。

3. 先述のバプティスタは、独裁政権下の1938年、「ポルトガルで最もポルトガルらしい村」を選ぶコンテストがあり、全国の村々で自分たちの村が一番「本来のポルトガルらしい村」であることを競い合い、その運動を盛り上げるための映画が作られたことを紹介し、そのナショナリズムとユートピア幻想が結合したような不思議な民族誌映像を上映した。

また、自国内に目を向けた地方／地域(しばしば辺境)の記録映像の中でも、ミラノのチネテカ・イタリアーノが保存するロンバルディア地方限定の映像集成やフランスのCNCが修復したヤニック・ペロンによる1946年作品「海藻(Goémons)」は一際注目を浴びた。前者はロンバルディアの歴史民俗資料館からチネテカがフィルムのデジタル化と恒久保管を依頼された40作(一篇30～40分ほど)を越す1970年代の貴重な民俗誌ドキュメンタリー(代表的な作家としてはブルーノ・ピアンタ)で、今は消えつつあるこの地方独特の伝統技術、手工芸などの映像も多く含まれている。後者は写

シンポジウムで「フィルムは光による三次元の彫刻であり、デジタルに変換できないメディアだ」と語るペーター・クーペルカ(右)と現地の映写技師

真ジャーナリスト、ドニーズ・ペロンの娘やニックが、ベニゲ島(ブルターニュ半島の西端沖に位置するモレーヌ諸島に属する)に渡って22歳の時に監督した(強いて言えば「できてしまった」)驚異の詩的ドキュドラマであり、海藻を採り加工する貧しい島民を描いた民族誌映画でもある。

その他、面白い例には限りがなく、カナダ人による北極探検、スイスの奇祭、メキシコの出産儀式から、幼児の馴けを意図した(秋田のナマハゲそっくりの)スロベニアの宗教行事⁸、氷点下40℃で暮らすフィンランドの母親と新生児の“暖かな”触れ合いの様子まで、世界中のFIAFアーカイブが集め保存してきた映像資産の豊かさには今更ながら驚かされるばかりで、ペーター・クーペルカなどは(正当にも)「すべての映画はエスノグラフィック・フィルムだ」と発言するほどであった。

シンポジウムの準備期間中に、テーマが地味なこともあって、「民族誌学者、人類学者による映像を使った専門分野の研究発表会」のようになることを懸念する声が強く、その前もっての危機感のおかげで、全体的には抽象論に墮すことなく、アーカイブが所蔵する使用頻度の少ないフィルムの新たな利用法や積極的なコレクション・アセスメントの必要性を考慮する十分な契機になったし、さらに劇映画とは違ったプログラミング・スキームの研究——撮影者、被写体、研究者、観客などが、劇映画とは異なる形で映像に“参加”あるいは“関与”していることから生じるさまざまな政治性、倫理性への繊細な配慮を含む——といった課題を世界のアーキビストたちに提供した点でも、大きな成果があったと思う。

デジタル時代に問う「フィルムとは何か？」

ある意味で上述のシンポジウム以上に注目を集めたのはFIAFテクニカル・コミッション(技術委員会、TC)によるワークショップ「フィルムとは何か？」で、TCメンバーを中心とする7人の専門家が、デジタル時代に敢えて「フィルムとは何か」を問うきわめて知的で未来志向の議論となった。

ノルウェーの映画技術研究者トーケル・ゼー

ターヴァーデット⁹はその発表で、映画フィルムが、(1)解像度が今も一般的には高い、(2)コントラスト比に優れ、黒の再現に優位性がある、(3)暗部における細部の再現に優れている、(4)色彩再現に優れている(画調、色解像度)(5)圧縮やピクセルに関与のないタンジブルなモノ(artifacts)である、(6)依然として最も普遍性の高い国際規格であること等を強調して、アーカイブがフィルム映写を継続していく効用と文化的な必要性を説いた。それを引き

継ぐ形でフィンランドのアンティ・アラネンが、「フィルムはユニバーサル・スタンダードであり、同時に“ラブ・アフェア”の対象だ」と述べ、「ビデオやデジタルが現時点で標準化されていない以上、フィルムは唯一のISO保存スタンダードである」、「標準的な映画館映写として2Kは不十分だと思うが、一方で、例えばシネマスコープには6〜8K、70mmには10Kと考えるのは現実的だろうか？ それは理論的には正しい方向性だろうが、技術あるいは資金の限界

総会決議事項、その他のトピック

- ◆ 今回の会議で、それぞれフランス(ニース)、ペルー(リマ)、オーストラリア(ブリスベン)、モンゴル(ウランバートル)、ドミニカ(サント・ドミンゴ)、イタリア(ジェノヴァ)にあるアーカイブ6機関が加盟し、FIAFの会員数は全体で141となった(今回はすべて準会員としての加盟)。それとは別に、昨年11月にベオグラードで開催された運営委員会でフランス(リヨン)のリュミエール協会が準会員として加盟することを認められたことが、今総会で発表された。
- ◆ 逝去された名誉会員であるジャンニ・コメンチーニ(チネターカ・イタリアーナ創業者、ミラノ、4月19日)とアイナー・ラウリツェン(映画史家、ストックホルム、6月8日)両氏が他数人のアーキビストと共に追悼された。会議自体は、シルヴァン・フルランに捧げられた。
- ◆ 役員と運営委員の選挙が行なわれ、会長エヴァ・オルバンツ、事務総長メグ・ラブラム、財務担当理事カール・グリープの三役は留任、運営委員10名については、7名が新たな人材に入れ替わった(内2名は準会員枠)。アジアからは正会員枠に1名が選出(副会長及びFAFAインターロキューター兼務)。
- ◆ 2005年度FIAF賞はマイク・リー監督に贈られることが発表された(贈賞の時機については、ロンドン映画祭が有力だが、現在、関係各方面と調整中)。一方で、FIAF創立会員の一つである英国NFTVA(現在、この名称は正式には使用されていない)の会員資格継続については、FIAF、BFI双方とも態度保留という状態が続いている。
- ◆ 「第二世紀フォーラム」では、FIAFのアーキビストが、「よく利用する／為になる／興味深い」(会員アーカイブの一般的な紹介ホームページなどではない)ウェブサイトの相互紹介セッションが行なわれた。その時、推奨されたサイトのURLリストは以下の通りである(日本のグループが発信元になっている映画保存協会(Film Preservation Society) www.filmpres.org も紹介された。なお、ここに挙げたウェブサイトが何らかの技術的問題あるいは更新・移動・停止等の理由でアクセスできない、表示できないこともあり得ますが、その点については本論の筆者としては責任を持ちかねますので、予めご了承ください)。

技術一般

The American WideScreen Museum	www.widescreenmuseum.com
Film Sizes	www.xs4all.nl/~wichm/filmsize.html
Kodak	www.kodak.com

保管

National Film Preservation Foundation	www.filmpreservation.org
Conservation online	www.palimpsest.stanford.edu

カタログニング

MIC	mic.imtc.gatech.edu
IMAP	www.imappreserve.org

調査

BIFI	www.bifi.fr/doc_site/francais/index.html
CineFiles	www.mip.berkeley.edu/cinefiles
BUFVC	www.bufvc.ac.uk/databases/newsreels
Library of Congress	www.loc.gov

フィルムグラフィー

Film Portal	www.filmportal.de
Archivio del cinema italiano 1905-2004	www.anica.it/archivio.htm
International Movie Database	www.imdb.com

アーカイブ運動団体

Archive Forum	www.afiresearch.rmit.edu.au/archiveforum
Center for Home Movies	www.homemovieday.com

FIAFテクニカル・コミッションのワークショップ

からではなく、むしろ解像度の高いデジタル・ファイルを用いた“海賊”行為が安易に横行するのを恐れるのが権利者のDRM (digital rights management) ポリシーにとって自然であるという理由で、さらなる超高解像度のスキニングが奨励されなくなるのではないかと結んだのも印象的であった。

彼らやTCの他の論者は、しかし、もちろんアーカイブがデジタル映写やデジタル・アクセスへのシフトに早急に対応すべきことも完全に視野に入れており、それは昨年の国産映画製作にHDCAMなどデジタル系の占める比率が43%に達したという事情を背景にして、デジタル・マスターを法定納付制度の対象とする場合の詳細な議論を始めているデンマーク映画協会や、コレクションの一部をブロードバンドでオン・デマンド配信する事業を昨年11月に開始したノルウェー映画協会などの発表¹⁰⁾に明らかである。

全体のトーンとしては、デジタルを感情的に

敵視するようなかつての“フィルム・ピューリス”的議論は完全に鳴りを潜め、(1)アーカイブがクライアントの自由度が高くなる方向で今後のアクセス対応を考えなければならない以上、デジタルへのシフトは当然であること、(2)デジタルの情報キャリアに関する適正な保管基準を早急に策定しなければならないこと、(3)徹頭徹尾映像の修復過程をコントロールできる、いわゆる“DIY”方式の可能性はアーキビストにとって明るい未来を拓くものであること、などといった前向きな論述が、FIAFの不変のドグマである「決して(オリジナルである)フィルムを捨てること」の周囲で活発に展開された、という印象である。



それにしても今回の会議では、とりわけ北欧諸国のフィルム・アーカイブが見せる熱意と知的レベルの高さ、そしてテーマに応じて映写してくれる保存フィルムの量と質と内容の幅に、参加者の多くが脱帽せざるを得なかった。そして、彼らにそれが可能である理由は、かつてアンソニー・スライドが羨望とともに指摘したように、たった一つしかない。実に単純に、彼らのアーカイブが、彼らの国の人口と映画生産量に比して、世界のどの地域よりも格段に多くのスタッフと資金とを擁して、手厚く自国映画遺産を守護しているからである。民族誌映画という地味なテーマへのアプローチにせよ、あるいはデジタル技術(というアーカイブ問題)への取り組みにせよ、それは揺るぎなく、事実である。

(フィルムセンター主幹)

註

- 1 原音に“v”を含む語の片仮名表記は、日本語への浸透度によって判断しているが、もちろん確定的なものではない。“archive”については「アーカイブ」を採用している。
- 2 首都Ljubljanaの発音は、2番目の“l”(エル)が殆ど聞こえず、日本語に表記する場合、「リュビヤナ」「リュビアナ」の方が近いように思われる。
- 3 最初のスロベニア映画は、カロール・グロスマン(1864～1929)によって撮影されたと考えられている。現存するのは1905年に撮影された2本と1906年の1本のみで、いずれも実写短篇。彼は若き日のフリッツ・ラングに影響を与えた人物としても興味深い。
- 4 この開会式では、フルラン(1953～2005、享年51歳)を偲ぶ短篇映画のほか、デジタル復元されたグロスマン(註3参照)撮影による短篇、山岳観光映画「ゴールデンホルンの王国」(ヤンコ・ラヴニク監督、1931年、無声、オーケストラ演奏)等が上映された。
- 5 本論中では“ethnographic film”を統一して「民族誌映画」と訳す。
- 6 アマチュア映画に関するFIAFのシンポジウムについては、本誌14号(2～8頁)、植民地映画に関しては38号(12～16頁)をご参照ください。
- 7 日本のNFCからは「白老アイヌの生活」(八田三郎、1925年、無声、染色版)の一部を出品した。
- 8 スロベニアは民族誌博物館の新館をオープンしたばかりだが、その中に映画映像部門を設置して、昔ながらの草刈りやパン作りといった日常風景から、チュバと呼ばれる伝統的な丸木舟の製作まであらゆる映像を保存し、あるいは再現製作しようとしている。
- 9 デジタル、アナログ双方の映像技術史に精通しつつ、日本の最新技術にも目配りしている新進気鋭の学者として今後の活躍が期待される。待望久しいFIAFの「新版映写マニュアル(The Advanced Projection Manual)」の執筆を終えた彼は、今回、デジタル映写情報に関する最新アップデートのプレゼンテーションも行なった。
- 10 www.filmmarkivet.no をご参照ください。

fiaf

東京国立近代美術館フィルムセンターは、国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)の正会員です。FIAFは文化遺産として、また、歴史資料としての映画フィルムを、破壊・散逸から救済し保存しようとする世界の諸機関を結びつけている国際団体です。

National Film Center (NFC) of The National Museum of Modern Art, Tokyo is a full member of the International Federation of Film Archives (FIAF). The Federation brings together institutions dedicated to the rescue and preservation of films, both as elements of cultural heritage and as historical documents.

東京国立近代美術館ホームページ

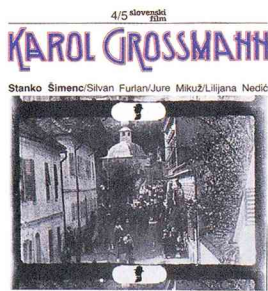
<http://www.momat.go.jp/>

お問い合わせハローダイヤル

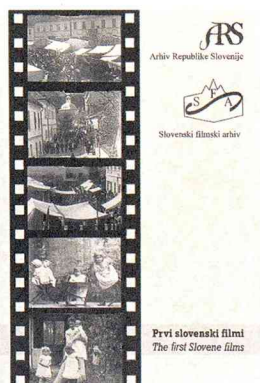
☎03-5777-8600



第61回FIAF会議のパンフレット



スロベニア映画のバイオニア、カロール・グロスマンに関する研究書



スロベニア映画百年を記念して製作された初期映画のDVD

「NFCニューズレター」第62号

(2005年8月-9月号/隔月刊)

発行・著作:

独立行政法人 国立美術館/東京国立近代美術館 ©

編集:

東京国立近代美術館フィルムセンター

〒104-0031 東京都中央区京橋3-7-6

☎03(3561)0823

制作:

印象社

発行日:

2005年8月1日

* 無断転載を禁じます。

NFC NEWSLETTER

Bimonthly

(Volume XI No.3 August-September 2005)

Published and Copyrighted by

The National Museum of Modern Art, Tokyo ©

(Independent Administrative Institution National Museum of Art)

Edited by

National Film Center

(The National Museum of Modern Art, Tokyo)

Add.: 3-7-6 Kyobashi, Chuo-ku, Tokyo 104-0031, Japan

Tel.: 03(3561)0823

Designed and Produced by

Insho-sha

Date of Publication:

August 1, 2005

* No part of this publication may be reproduced or reprinted without the approval of the publisher.